



Nguyen Thanh Phuc

京都大学工学研究科分子工学専攻 講師
(前 理論・計算分子科学研究領域 助教)



分子研での研究生活と感謝

ゲン タン フク / 2014年3月東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士後期課程修了、2014年4月～2016年3月理化学研究所創発物性科学研究センター特別研究員、2016年4月～2017年3月同上基礎科学特別研究員、2017年4月～2020年8月分子科学研究所理論・計算分子科学研究領域助教、2020年9月より現職。

2017年4月より2020年8月まで、分子科学研究所理論・計算分子科学研究領域石崎グループの助教としてお世話になりました。3年4か月の間、川合所長、石崎教授をはじめとする数多くの先生方、石崎グループの皆様、山田さん(旧秘書)と赤羽さん(現秘書)などの分子研に携わる職員の皆様の支えにより、充実した研究生活を送ることができました。誠にありがとうございました。

理学系研究科物理学専攻で卒業した私は、分子研に移る前に、分子に関する研究をする機会がほとんどありません

でした。原子物理や物性物理の研究を行ってきた私は分子科学の研究を始めたときに、様々な困難と直面しましたが、川合所長と石崎教授の激励をはじめ、石崎グループの皆様方が、研究から事務的な部分まで、本当に温かく、様々な面で支えてくださいました。こうした支えがあって、私は分子系における量子ダイナミクスの制御という研究テーマに励むことができました。そして、この研究の業績は評価されて2020年の第9回自然科学研究機構若手研究者賞を受賞しました。深く感謝しております。

私は2020年8月末に岡崎を離れまして、現在京都大学工学研究科分子工学専攻におります。分子研にいた時と違って、今は研究だけに集中することができなく、授業などの教育活動も担当しています。分子研で培った多くの経験を活かして、今後も研究活動を精力的に進めていきたいと考えております。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

塚本 寿夫

神戸大学大学院理学研究科生物学専攻 准教授
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

オーファン助教の延長戦

つかもと・ひさお / 2006年に京都大学大学院理学研究科生物学専攻で博士号を取得後、大阪市立大学・Oregon Health & Science Universityで博士研究員、分子科学研究所で特任助教・助教として勤務した後、2020年6月から現職。2017年10月から2021年3月まで、さきがけ「光操作」領域研究者。京都・大阪・神戸の「三都」を制覇(?)できてうれしいです。



9年近く(も)お世話になりました分子研から2020年5月いっぱいで転出しまして、6月に神戸大学大学院理学研究科生物学専攻に着任しました。

異動後しばらくはラボ立ち上げなどに専念していましたが、10月から講義や実習の担当がはじまり、大学教員としての仕事の洗礼を日々受けています。

私は2011年に(旧)古谷グループの特任助教として着任した後、2014年に助教に採用していただいて、光受容タンパク質やイオンチャネルの分光

解析や機能特性の解明に取り組みました。特任助教から助教に採用された際には、「6年ルール」をどう運用するかが議論となり、特任助教採用期間の半分を加算することに（私の場合は）なりました。ところが、私の力不足で「6年ルール」期間内に転出することができず、2018年10月に古谷先生が名古屋工業大学に異動されてからは、「延長戦」を「オーファン」状態で過ごしました。古谷先生が転出された際には、どうしたものかと思いましたが、川合所長からは「いい研究して、いいところに転出したらいんじゃない」と温かい(?)言葉を頂戴し、秋山先生には「今攻めなくていつ攻めるのですか?」と激励(?)され、自分なりに踏ん張りまして、幸運なことに神戸大

学に採用していただきました。

分子研にいた頃は「どうやって転出しようか」と考える毎日でしたが、いざ転出すると、授業や会議で一日が終わることも多く、研究に専念した分子研での日々を懐かしんだりします。また、生理研の久保義弘先生、基生研の上野直人先生・酒井祐輔博士（現大阪市立大学）、総研大の蟻川謙太郎先生と共同研究できたのは、分子研・総研大にいたおかげと思っています。

分子研では、古谷先生に研究指導や論文作成などで、言葉で言い尽くせないほどお世話になるとともに数え切れぬご迷惑をおかけしました。古谷先生が異動された後は、川合所長から機会ごとに発破をかけられ、秋山グループの皆様にはラボミーティングに快く

加えて頂き、難しさのあるオーファン生活を刺激的なものにして頂きました。また、技術課の繁政先生・内山係長には何かと目をかけていただき、真夏に実験棟屋上の芝刈りをお手伝いしたのはいい思い出です。古谷グループの皆さんには本当にお世話になり、とくに古谷先生異動後も私の研究を支援していただいた本村さんと稲葉さんにはお礼の言葉もありません。またオーファン助教になった私の会計処理や出張手続きなどをしていただいた、清水さん・増田さん・萩原さんに深くお礼申し上げます。お礼だけで規定字数になりましたが、分子研のこれまで以上の発展を祈っております。

森 俊文

九州大学 先端物質化学研究所 准教授
(前 理論・計算分子科学研究領域 助教)

分子研での平和な日々と激動の2020年

もり・としふみ / 2005年3月京都大学理学部卒業、2010年3月京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)。Stanford大学、Wisconsin大学Madison校での博士研究員、日本学術振興会海外特別研究員を経て2013年11月より分子科学研究所・助教。2020年10月より九州大学先端物質化学研究所准教授(現職)。九州大学大学院総理工学府(物質理工学専攻)を兼任。



2013年12月、分子研への着任は、久々となる日本での生活にワクワクと懐かしさを感じながらのスタートでした。同時に、研究所にいくからにはきちんとした成果を出さねばという気負いもあったと記憶しています。始まってしまえば、学生の出入りが少なく時間の流れがゆっくりに感じられるので、着実に上がっていく子供たちの学齢を見ては過ぎてしまった時間に時折焦りを覚えるということを繰り返す日々でした。

研究の方は、着任前年に一大決心を

して研究分野を大きく変えたため、実績ゼロからのスタートでしたが、その分果敢に(無謀にも?)タンパク質のフォールディングや酵素反応など古典的な研究テーマに挑むことができ、ダイナミクスという切り口から自分の色を出した研究を展開できたかと思っています。さらに着任早々に秋山教授らと時計タンパク質に関する共同研究を始める機会にも恵まれたことで、実験データを理解するのに悪戦苦闘しながらも、楽しく刺激的な時間を過ごせました。これらの研究をかなり自由にや

らせていただけたことを齊藤教授には深く感謝していますし、またそういう文化が根付く分子研の環境は、今の時代改めて貴重だと感じます。

研究以外では、飲み会、テニス、卓球、優勝も経験できたソフトボール大会と、思い返すととても充実していたと改めて思います。また、分子研のコンパクトな環境のおかげで気づけば顔見知りが増え、自分の研究では直接関わることがなかった多くの若手研究者の仲間ができたことが強く印象に残っています。加えて官舎住まいだったおかげで、

子供や家族を通して、分子研以外にも基生研や生理研の研究者の方々とも知り合え、本当に人との出会いに恵まれた日々でした。研究者としてはそろそろ出て次のステップに進みたいと思いつつ、岡崎での生活は公私ともとても充実した日々だったので、出所できたことはとても喜ばしいことですが、岡崎を去ることに寂しさも感じています。

2020年からは一転して新型コロナの世界的大流行で、どこも大混乱に陥っています。そんな中9月末にひっそり

と分子研を去り、九州大学先導物質化学研究所へとやってきました。新天地では、新たな研究室を立ち上げる機会に恵まれ、ずっと使われていなかった部屋の改修からスタートし、文字通りゼロから研究室を作り上げている日々です。私がいる筑紫キャンパスは九州大学のメインキャンパスではないため、学生も少なく静かであり、分子研と似た環境です。新天地ではまだ居心地の悪さを感じますが、また充実した日々を過ごせるよう、今後とも一歩ずつ進んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、大峯、川合両所長をはじめ、斉藤教授、秋山教授、秘書の千葉さんおよび斉藤グループの皆さんには大変お世話になりました。また、理論フロアの皆様や様々な活動を通してお世話になった多くの皆様には、名前を挙げきれませんが深く感謝しております。どうもありがとうございました。

覧古考新27 | 1998年

数年前、つつじの季節にカナダNRCの研究者が訪ねてきた。彼は、研究棟のわれわれの部屋からの眺めに飽くことなく見とれていた。オタワの夏はとくに美しいが、その地に住む人からの称賛である。この称賛は赤松先生に負うところが大きいと思う。先生は環境整備に大変気を使っておられた。実験棟の化粧タイルを選ぶのに多数の見本をとりよせ、旧図書館前でためつすがめつしておられたお姿が思い出される。長い時間保存されるものには贅沢と誇られる程金を使えといっておられたように思える。貧困な環境に馴染むことは恐ろしい。いとも容易に同化し、やがては精神の高揚まで失われてしまう。

.....

先生は、基礎研究といえども社会的ニーズと無関係ではありえないという主張をお持ちで、このニーズを先見性的に見通すことが基礎科学を担う者に課せられた重大な責務であると考えておられたようである。早くからエネルギー問題に関心を寄せられ、分子科学研究所が特別研究の一課題としてこれを取りあげたことを誇りにしておられた。「昨今は猫も杓子もエネルギーを口にすると」後年苦々しげに言っておられたのを記憶している。次の時代の社会的ニーズは何とお考えだったのだろうか。一度先生からゆっくりとお考えをきかせていただきたく思っていたのに残念である。

.....

赤松先生、長倉先生と共に過ぎた分子科学研究所の創設期は終わった。先生方の築かれた土台の上に研究所の飛躍が始まろうとしている。しかし折にふれ「創設期」の精神を省み、そこから多くの教訓を再び学びとりたいたいものである。

分子研レターズ No.19「赤松秀雄先生とともに過ぎた6年間」(1988年)

廣田 榮治 (分子科学研究所教授)